

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23300096

研究課題名(和文) 広島における核・被ばく学研究基盤の形成に関する研究

研究課題名(英文) Studies on the Establishment of the Research Base of Kaku Hibaku (Radiation Exposure) Research in Hiroshima

研究代表者

小池 聖一 (Koike, Seiichi)

広島大学・国際協力研究科・教授

研究者番号：70274024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円、(間接経費) 3,660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人文・社会科学分野における核・被ばく学研究を推進する上で必要な学術情報および資料情報の共通基盤形成を進めた。

研究班では六分野(原水禁運動・市民運動、核軍縮・核廃絶、被爆体験の精神史、被爆者対策の国際比較、平和教育、原爆報道)に分かれて先行研究の分析を行った。この結果、各分野における研究の偏在状況を明らかにした。また、資料整理班では、広島県内の歴史資料保存機関が収蔵する核・被ばく関連の資料の情報を収集するとともに、新規資料の収集・整理を進め計32,760点を公開した。

研究成果の概要(英文)：This research develops the establishment of a common base of academic information and documentation necessary to propel Kaku Hibaku(Radiation Exposure)Research in the field of humanities and social science.

Our research group is separated into 6 sections (Movement to Ban Nuclear Bombs/Civic Movement, nuclear disarmament/total abolition of nuclear weapons, intellectual history of A-bomb experiences, international comparison of A-bomb victim support, peace education and press reports about the bombing) and analyzes previous study. The document group collects information about Kaku Hibaku related documents stored at various archives for historical records in Hiroshima Prefecture, also discovers and organizes new documents and has already published 32,760 documents and materials.

研究分野：日本近現代史

科研費の分科・細目：情報学、図書館情報学、人文社会情報学

キーワード：平和 原爆 被ばく 史資料

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 広島・長崎の原爆・被ばく研究

昭和 20 年 8 月、広島・長崎は投下された原子爆弾により一瞬にして壊滅し、数十万人の命が失われた。そして生き残った被爆者も、長年に渡り放射線の後遺症に脅かされることとなった。このように原爆災害が激甚であったため、初期の原爆に関する研究は、被爆者の治療と被害の実相解明(被害の規模や投下の歴史的経緯など)を中心に進められてきた。こうした一連の研究は、広島・長崎の研究者が共同研究を行った『広島・長崎の原爆災害』(岩波書店、昭和 54 年)などに集約されるに至った。

その後、医学分野の研究は、国内の被爆者からチェルノブイリ原発事故の被害者や旧ソ連のセミパラチンスク実験場周辺住民など、海外の「被曝者」へと重点を移行させていった。一方、人文・社会科学分野の研究は、原爆被害そのものから、被爆者援護活動、原水爆禁止運動、原爆文学、平和行政など周辺の個別の分野へと展開していったのである。こうした広島・長崎の原爆・被ばく研究は、現在いくつかの問題を抱えている。

主として人文・社会科学の分野について指摘すると第一に、問題の時期的関心が原爆投下前後に集中したことがあげられる。この傾向は研究の問題関心が個別分野に展開した後も顕著である。第二に研究が、原水爆禁止運動、被爆者援護活動と不即不離の形で展開してきたことがあげられる。こうした研究は初期の被爆者救済に大きな力となったが、一方で運動における政党間の対立が研究の深化を妨げた側面があるのも事実である。また、平成 7 年の被爆者援護法制定により運動に「一区切り」ついたという誤った印象が抱かれたため、研究の停滞をもたらすこととなった。

第三は、研究の個別化が進み学際・領域・各国間の研究交流が困難になっていることである。これは各分野の研究が連繋を欠くだけでなく、広島と長崎の連帯が希薄化するという結果も生み出している。このため両都市の比較研究や国際的な観点からの分析が決定的に不足している。

### (2) 史資料の集積状況(広島の事例)

昭和 40 年代、中国新聞社論説主幹・故金井利博氏は「核兵器はその人間的悲惨さとしてではなく、その威力において世界に知られている」と説き、被害の実態を明らかにするため「原爆白書運動」を提唱し、原爆・被ばく関係の書誌類の収集を行った。「原爆白書運動」は、三冊の書誌目録を刊行したものの、事実上、昭和 51 年で活動を休止している。

その後、広島大学原爆放射線医科学研究所および平和科学研究センターが、書誌および新聞記事を中心にデータの集積と公開を進めたものの、現在では停滞している。また、

広島平和記念資料館も一次資料の収集・整理・保存・公開を行っている。ただ、その大半は原爆投下直後の物品に関するものである。

このように被爆者のライフヒストリーに関する史・資料や平和運動、平和教育、原爆報道に関する史・資料など、周辺領域の史・資料の収集・十分に行われてこなかったのである。

### (3) 現状について(広島事例)

上記(1)(2)のような状況を踏まえ、広島大学においては、異分野間の共同研究や広範囲にわたる被ばく関連資料の収集に着手している。については、平成 17 年より広島大学では原爆放射線医科学研究所国際放射線情報センター、平和科学研究センター、文書館の学内 3 機関が連携して事業を展開してきた。また、平成 19 年に広島大学文書館と広島市立大学広島平和研究所の研究者を中心に広島戦後史研究会を設立し、研究交流の環境を整備してきた。

については、平成 17 年に広島大学文書館に平和学術文庫を設置し、大学院総合科学研究科の平和科学研究プロジェクトの支援も得ながら、従来他機関では収集されてこなかった分野の関連史資料の収集・整理に着手したのである。

## 2. 研究の目的

原爆投下から 60 年以上が経過し、被爆者やその関係者の高齢化が著しく進んでいる。これにともない関連資料が散逸する可能性が増大している。このことは、これまで積み重ねられてきた平和運動や被ばく研究の成果を後世に伝える上で大きな障害になると考えられる。

そこで本研究では、原爆投下から現在に至る過程を包括した史資料の収集・整理・公開を行い共通の研究基盤を形成する。また、研究機関の有する割拠性を超えて協同研究を推進することで、医科学や放射線物理学に比べ立ち遅れが指摘される人文・社会科学分野における核・被ばく研究をさらに深化させる。こうした取り組みは、最終的に医科学や放射線物理学とともに被爆地固有の平和学・「核被ばく学(研究)」の創成を目指すものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究班と資料調査班を設置し、両者間で情報交換・共有を行うとともに、その過程で比較分析を行った。

このうち研究班は、分野別に研究史整理を行いつつ、資料班の資料整理を補助し、研究史のなかで資料群の位置づけを行った。同時に各研究分担者は、並行して個別研究をすすめ、積極的に成果を公表した。

また、核・被ばく学の創設に向け、研究の立ち遅れた人文・社会科学分野における学際的な研究交流・方法論の共有、新たな分析視

角の開発等を行うため積極的に研究会を開催した。その上で、得た知見について資料調査班・研究班共同で報告書を刊行し、広く一般に公開するよう努めた。

一方、資料調査班は、地元新聞社および研究会等の情報提供をもとに個人で所蔵されている原爆・被ばく資料の所在確認を行い、所有者同意を得て整理(仮目録作成)、保存作業を行った。その上で詳細な本目録を作成し、解題を付して広島大学文書館にて一般公開し、データベース化を図った。

#### 4. 研究成果

研究班については、各研究分担者が六分野(原水禁運動・市民運動、核軍縮・核廃絶、被爆体験の精神史、被爆者対策の国際比較、平和教育、原爆報道)に分かれて先行研究のリスト作成および研究史整理を行った。そして研究会で相互に確認した上で、最終年度に成果報告書『広島における原爆・核・被ばく関連の史・資料の集積と研究の現況』にまとめた。

すなわち広島における核兵器による核被害そのものについても、未だ、その実相について多くの問題点、史資料の欠落等が存在するとともに、証言や言説と事実・実態との間にも時間の経過もあって多くの誤差・誤解が生じていることを明らかにした。

また、今後の課題として史資料情報の底辺拡張と情報共有化を促進させるとともに、六つの方向性をもとに核・被ばく学の学際化をより促進し、同時に総合学としての体系化を行うことが重要であることを明らかにした。

さて、こうした作業と同時に各研究分担者は個別の事例研究を進めた。そのうち主なものを以下、紹介する。水本は、近年の核廃絶に向けた動向を分析し「核廃絶に向けた最近の動きと関係国の思惑」などに研究成果をまとめた。

川野は、広島およびセミパラチンスクでの被ばく証言の分析と比較を行い、「原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被爆区分別特徴について」や“Mapping the Fire Field near the Hypocenter of the Hiroshima A-bomb”など複数の論文等に成果をまとめた。

布川は、原爆投下後に広島に進駐した英連邦軍の関連資料を調査・分析し、“Defeat and ‘the City of the Dead’ In View of BCOF Personnel Occupying Kure and Hiroshima”などに成果をまとめた。

これらの研究実績は、いずれも担当分野の一部であり、今後さらなる成果が期待されるものである。

次に資料整理班については、研究班と合同で研究会を開催し、公的機関の資料収蔵状況について関係者から聞き取りを行った。この記録については、成果報告書『広島における原爆・核・被ばく関連の史・資料の集積と研究の現況』において掲載・公開し、広く情報共有できるよう配慮した。

また、資料の調査および収集・整理を進め、『大牟田稔関係文書目録』資料編1(広島大学文書館、2013年3月、14,066点)、『大牟田稔関係文書目録』資料編2(広島大学文書館、2014年2月、17,596点)、『ビル・シェリフ関係文書目録』(広島大学文書館、2014年2月、1,098点)を刊行した。この結果、広島の平和運動や復興、原爆報道などに関する資料、計32,760点を新規に公開することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計18件)

1. Kyoko HIRABAYASHI, Noriyuki KAWANO, Talgat MULDAGALIYEV, Kazbek APSALIKOV, The psychological effects and their factors among inhabitants around the Semipalatinsk Nuclear Test Site: Results of questionnaires and interview surveys from 2002 until 2012, Japanese Review of Political Society, 査読有, Vol.2, 2014, pp 7-19

2. 小池聖一, 梶山季之と広島, 広島県郷土史研究協議会機関誌, 査読無, 31, 2013, pp5-14

3. 松浦陽子, 佐藤健一, 川野徳幸, 広島の平和観 - 平和宣言を通して -, 広島平和科学, 査読有, 35, 2013, pp67-101

4. 辛亨根, 川野徳幸, 韓国人被爆者問題をめぐる草の根交流, 広島平和科学, 査読有, 35, 2013, pp103-128

5. 布川弘, 国際的な平和運動における新渡戸稲造と賀川豊彦, 賀川豊彦学会論叢, 査読無, 第21号, 2013, pp1-38

6. 水本和実, 原発事故は日本の核政策を変えるか 2011年の核をめぐる動向と論調, 広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告, 査読無, 第9号, 2013, pp43-59

7. 水本和実, 核軍縮・核不拡散の現状と問題点 遅々として進まない核廃絶への道 米国が新提案、広島・長崎で新たな取り組み, インテリジェンス・レポート, 査読無, 59号, 2013, pp4-20

8. 川野徳幸, 原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被爆区分別特徴について, 広島医学, 査読有, 65巻4号, 2012, pp322-326

9. 川野徳幸, 広島大学学生の内原爆・原爆被害理解度に関する試論, 広島平和科学, 査読有, 34, 2012, pp189-208

10. Hiroshi Nunokawa, Defeat and ‘the City of the Dead’, Cultural Interaction Studies of Sea Port Cities, 査読無, 7, 2012, pp45-62

11. 小池聖一, 森戸辰男の一般教育観, 広島大学文書館紀要, 査読無, 14, 2012, pp1-17

12. 石田雅春, 広島における被爆建造物の保存運動, 建築雑誌, 査読有, 1635, 2012, pp33-33

13. 水本和実, 核廃絶に向けた最近の動きと関係国の思惑, インテリジェンス・レポート, 査読無, 47, 2012, pp4-20
14. 水本和実, 10年ぶり NPT 最終文書採択で流れ変わるか? 2010年の核をめぐる動向と論調, 広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告, 査読無, 8, 2012, pp57-73
15. 川野徳幸, 佐藤健一, 原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被爆区分別特徴について, 広島医学, 査読有, 33, 2012, pp322-326
16. Noriyuki KAWANO, Megu OHTAKI, and Takao OKADA, Mapping the Fire Field near the Hypocenter of the Hiroshima A-bomb, Revisit The Hiroshima A-bomb with a Database Latest Scientific View on Local Fallout and Black Rain, 査読有, 2011, pp15-24
17. 水本和実, 広島戦後復興 原爆投下から街はどう立ち上がったか, インテリジェンス・レポート, 査読無, 35号, 2011, pp4-26
18. 水本和実, オバマの登場で再浮上した核廃絶 2009年の核をめぐる動向と論調, 広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告, 査読無, 7号, 2011, pp85-101

〔学会発表〕(計8件)

1. Hiroshi Nunokawa, The Making of the Modern State in Japan and Naval Expertise, Naval Expertise Conference, 2013.5.11, University of Oxford (イギリス)
2. Hiroshi Nunokawa, The 'Atomic Plague' and the Low-dose Radiation Exposure, The Sixth Conference for the Asian Society for the History of Medicine, 2012.12.14, Keio University (日本)
3. 水本和実, 広島から見た核軍縮の課題と日本の役割, 第20回核戦争防止国際医師会議世界大会, 2012.8.25, 広島国際会議場 (日本)
4. Kazumi Mizumoto, Nuclear-Free-Zone in the Northeast Asia: Its Prospects and Challenges, Jeju Peace Institute-Hiroshima Conference Peace and Cooperation in East Asia, 2011.12.20, 広島市立大学広島平和研究所 (日本)
5. Hiroshi Nunokawa, Defeat and 'the City of the Dead' In View of BCOF Personnel Occupying Kure and Hiroshima, International Symposium on the Naval Port, 2011.8.25, Gyeongnam Development Institute (韓国)
6. Noriyuki KAWANO, Outlines of Atomic Bomb Afflictions in Hiroshima and Nagasaki, CNAS-HiPeC5th Internal Seminar Jointly organized by CNAS-HiPeC, 2011.7.29, Bishwa Bhasha Campus, UNRCPD and Nepal Tourism Board (ネパール)
7. 永井均, 象徴としてのマニラ戦 米太平洋陸軍の戦争犯罪捜査をめぐる断章, 国際シンポジウム「マニラ戦の実像と記憶 未来に向けていかに記憶するか」, 2011.7.24, 一橋

大学 (日本)

8. 川野徳幸, 佐藤健一, 原爆被爆者の体験記・メッセージに関する被爆区分別特徴について, 第52回原子爆弾後障害研究会, 2011.6.5, ホテル八丁堀シャンテ (日本)

〔図書〕(計12件)

1. 永井均, 講談社, フィリピン BC 級戦犯裁判, 2013, pp294
2. 永井均, 法律文化社, 平和を考えるための100冊+, 2013, pp300(29-32)
3. 布川弘, 慶應義塾大学東アジア研究所, アジアの「核」と私たち, 2014, pp.356(1-28)
4. 水本和実, 小池聖一, 川野徳幸, 永井均, 株式会社ぎょうせい, 広島の復興経験を生かすために 廃墟からの再生, 2014, pp164(1-3, 87-91, 115-117, 139-158, 161-164)
5. 小池聖一, 布川弘, 水本和実, 石田雅春, 川野徳幸, 小宮山道夫, 永井均, 安藤福平, 落葉裕信, 宇吹暁, 渡辺琴代, 広島大学文書館, 広島における原爆・核・被ばく関連の史・資料の集積と研究の現況, 2014, pp280
6. 広島大学文書館, 広島大学文書館, 大牟田稔関係文書目録資料編2, 2014, pp435
7. 広島大学文書館, 広島大学文書館, ビル・シェリフ関係文書目録, 2014, pp27
8. 広島大学文書館, 広島大学文書館, 大牟田稔関係文書目録資料編1, 2013, pp461
9. 川野徳幸, 朝倉書店, 朝倉世界地理講座五中央アジア, 2012, pp470(201-213)
10. 布川弘, 花伝社, 原子力と冷戦 日本とアジアの原発導入, 2013, pp269(109-128)
11. 広島大学文書館, 現代史料出版, 小笠原臣也回顧録 私の人生公路, 2012, pp367
12. 川野徳幸, 今中哲二, 竹内高明, 広島大学平和科学研究センター, IPSHU 研究報告シリーズ No.46 チェルノブイリ・旧プリピャチ住民へのインタビュー記録, 2012, pp184

〔その他〕

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/hua/news/140311kaken23.html>

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/hua/catalog/peace.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小池 聖一 (KOIKE SEIICHI)  
 広島大学・大学院国際協力研究科・教授  
 研究者番号: 70274024

(2) 研究分担者

水本 和実 (MIZUMOTO KAZUMI)  
 広島市立大学・広島平和研究所・教授  
 研究者番号: 20305791

布川 弘 (NUNOKAWA HIROSHI)  
広島大学・大学院総合科学研究科・教授  
研究者番号：30294474

川野 徳幸 (KAWANO NORIYUKI)  
広島大学・平和科学研究センター・教授  
研究者番号：30304463

永井 均 (NAGAI HITOSHI)  
広島市立大学・広島平和研究所・准教授  
研究者番号：40347620

小宮山 道夫 (KOMIYAMA MICHIO)  
広島大学・文書館・准教授  
研究者番号：60314720

石田 雅春 (ISHIDA MASAHARU)  
広島大学・文書館・助教  
研究者番号：90457234